
なんかもうどうでもよくなってきた

21144444

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんかもうどうでもよくなってきた

【Nコード】

N5309Y

【作者名】

21144444

【あらすじ】

アルバイトしてたら前後左右が炎だったよ！外に出たら下が崖でした！

OKなにこの冗談意味わかんないか思ってたら神に出会ったから転生してもらうことにする。さて、楓ちゃんとはもう出会えないし新しい出会いをして平和に暮らさなければ！…え？無理？

プロローグ（前書き）

テンションだけで書いた、後悔はがつつりしているけど、何故か投稿した。

プロローグ

真っ赤な世界、それは幻想的だった。

正直いうと、熱さに問題ありというところだが、まあ仕方がない。だっているところが燃えてるんだもん

「what's happen!?!」

とりあえず叫んだ。

頭の冷却完了

思考を冷静化

現状確認開始

右をみる、火だ

左をみる、火だ

前をみる、火だ

後ろをみる、火だ

現状確認完了

OK 絶望的

「…嫌だアア!？」

『現状を確認してみたら絶望的だったでござるの巻』

忍者ハットリ君だったら現状を切り抜けられるとか思ったら変な夕イトルがわいてきたよ、とりあえずどうするべきかな？
そう思っと思いついたのは、ドラマである水をかぶって火の中に突入するシーン

Oh! good idea!

「そうと決まれば水だ!山奥にきたんだから水ぐらいもってきてんだろ!」

そう、この現状は山奥の小屋にアルバイトできていることからはじまる

三日住むだけで10万円!とそこはかたく呪われている感しか感

じられないが、金欠だった俺はアルバイトをすることに決めたわけだ。

…でこの現状だ
もってきたバッグを漁ればやわらかいもの、ペットボトルだ。

「とつたどオオ！」

ハイテンションでそれを外に出す。やったねたえちゃん！
でてきたペットボトルをみる

『コカ・コーラ』

ここに来るときの俺の思考に対して殺意が湧いた

背に腹は代えられない、そう思ってコカ・コーラのキャップを開けてひっくり返す。

ジヨボツ

…

……しょぼいというか最悪な量の上一瞬で蒸発して砂糖のみのこるべとべとする

不快感マアアアツクス！

「くぁwせdrftgyふじこlp:~@」

意味不明の言葉を発して今の怒りを表現する、今の俺をみれば……そう
人類全員が警察をよぶだろう。

地団太を踏んで怒りを解消すれば、すぐに冷静に慣れた
目の前をみる

オウイエエエエイ

轟轟と燃える炎、その迫力はすさまじい

だがそれ故に燃え尽きるのも早い

つまり、だ

今見ている壁ももろくなっている可能性が高いということだ
それに希望を感じ壁をにらむ

「フツ…俺の一撃を見せてやる！シャイニングウウウ！」

以下省略

…色々とやってみたが、壊れなかったのでキレてその場にあった金
槌を投げれば壁が壊れた。

俺の努力はなんだったのだろう、張り手をかました手が痛い
なんだか死にたくなってくる。つつか壊した瞬間にちよつと爆発し
たぞ

「まあいいや、いくぞ！俺！かえつたら楓ちゃんに告白するんだ！」

楓ちゃん、大学の友達で美人だが暗い女の子だ。

それ故にあまり人に近づかれないが、話してみたらいい子だった。

それ故にズッキューンツてきた。

そして今まさに後悔している。

死亡フラグをたてたんじゃないかと

突撃開始をしているために止まれない、というか止まったら死ぬん
じゃないか？

「うオオオオオ！」

風になるような気分だった

恐ろしいくらいに風を感じる

冷たい空気、そう俺は外に出たのだ

青々と茂る目の前の世界に涙がでる

そして俺は

落下した

崖ですかあ

死亡フラグたてたのが原因？そんなものなの？っていうかそれが原因だろ、っていうか何で火事とか怒ってやがんの意味不明、楓ちゃん楓ちゃん、とりあえず俺どうしたらいい？うん本気でそう思うんだけど

そう思っていると携帯の音が鳴ったので携帯を取り出す

愛する地面へと感動の再開までまだありそうだ

開けてみると楓ちゃんからのメールだった。

『いきなりこんなメールしてごめんなさい、でも決めたから言おうって思ってたんです。明後日、いつしよに帰りませんか？そこでいいたいことがあるんです。』

…ああ

なんだろな、うん、告白だったらしいなあ

うんでもね、無理です

うん無理

うははこの世界なんて滅んでしまえ

「バルスッ！」

ぐしゃっ

プロローグ2（前書き）

とりあえずプロローグだけ終わらせる。

でも本編はいけるかどうかわからない。

知識が20巻までの上、にわかすぎて死ねる。

プロローグ2

中学生の女の子

ショートボブの女の子

「やあ僕神様」

さて、俺は何故ここにいるのだろうか、訳が分からないよ

「あ、落下したのか」

そう考えてたら思い出す、ちょっと前のことだった。

そしてこれは落下地点か、そうかそうか

落下してバルスッって叫んだのを思い出せるよ

「そして俺は空中三回転ひねりをくりだし 華麗に着地をして今に至ると」

「はいはい、そんなことを思っていた時期もありましたね」

手をひらひらさせて呆れたようにいつてくる…えつと亜美さんだっけ？

「ちつがーう違う違う、どれだけ違うというならラーメンとソーメンくらい違う！」

大きな違いを見いだせない俺が馬鹿なのだろうか、それともこいつが馬鹿なのだろうか
おそらく後者だ

「加美様？女王様って自分でいつている痛い子？」

「OKイイ、分かった、君の現実逃避能力スキル全日本選手権第一位を総なめするその能力はよくわかった、とにかく話が進まない、現実を受け入れるんだ。」

「加美様：お前がナンバーワンだ。」

「なにその野菜王子みたいなセリフ、まったくうれしくないうえに理解しようよ、君は死んだんだゴートウーヘヴンなんだ。」

「そこはyou deadっていえよ、うんごめん、加美様はわざとなんだよね？女王様ア」

「やめてよ！間違っていないはずなのに恥ずかしいよ！っていつか話を聞いてよ！泣くよ！？泣くよ、この中学生という年齢のいまだ幼さ残るプリティーフエイスで泣いちゃうよ！？この世の我が可愛さにより奴隷志願してくるようなやつらが波となって押し寄せてくるよ！？嫌だよな？嫌だよな？だったら話を聞こう！」

「…それは嫌だな、よし！話は聞かない」

「よっし話がススマネエエエ！」

「『加美様はノリツツコミを覚えた！』」

「うオオオオ！話を聞きやがれエエエ！」

さつきまでの元気っ娘みたいなのりはどこにいったのやら

…おちよくりすぎたのかもしれない

やれやれ

「わかった、わかったよ話を聞いてやる。」

「え、ホント？」

「ただし三文字以内だ」

「聞くつもりさっぱりねえよこの糞が！」

「わかった、六文字だ！」

「二倍になってもできないよ！？臥薪嘗胆とかそついう感じの深い意味がある言葉を使わなきゃ不可能だよ！？」

「使えよ」

「つかえねえからいつてんだよオオ！」

…ふう、いい加減疲れてきたな

ちゃんと話を聞いてやることにしよう

「べつ別にあんたのために聞いてあげるんじゃないんだからね！勘違いしないでよね！」

「はいはいワロスワロス」

「べつ別にあんたの「しつけえ」……」

加美様とやらの変貌ぶりに驚くしかない

「絶望した……アイドル系の表と裏の違いに絶望した。」

「……」

「ハッどうせ女なんて裏表あるビッチなんだよ、ケツ」

「……オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！もう一度死にたいかアアアア！」

Oh、カミサマ、オコツチャイマシタカー？

「チツクシヨウ、アタイは神様なんだぞ偉いんだぞチクシヨオオ……美しい女神さまなんだ……」

「ハイハイワロスワロス」

ブチンツという音が女神殿から聞こえたがスルーしようと思う。

「メアリー、なんで僕はここにいるんだい？H A H A H A」

「なんだそのホームドラマな感じは…」

「オット、それはいつちやいけないと約束したじゃないか、メアリ」

「フーかメアリーじゃないよ、女神様が神様って呼べよ」

「H A H A H A、わかったよメガミ」

「なんかメアリーと同じ感じに言われた!？」

「さて、女神様、君の話の話を聞かせてくれるかい？」

「…もういいよ、話が進むならそれでいい、単刀直入に言うと転生しろってことなのさ。」

「そして俺は空中三回転ひねりをくりだし 華麗に着地をして「死んだから、うん死んだからね」…わかったのに何をいつてんだ?」

「うわうっぜ、こいつうっぜ」

「まあいいさ、ふうっそれで、転生しろって?それなんてテンプレって言うてもいいかい?」

「いいよ別に、能力を願えよ。最強になれよバーカバーカ!」

「じゃあナデポ」

「そこでそれかよ！」

ほかに何を願うっていうんだい女神様。

もてない男がもてる主人公にたいしてハンカチを噛んで殺す、殺すと考えるのは普通だから

「普通じゃないから、むしろ異常だから」

「何故心を読んだ…まあいいさ、よくわからないけど、そのいく場所にあるもの全部ありえへんことになってればいいよ。」

「うわアバウト、だけど理不尽なほど簡潔かつ絶対的最強になる願う。」

「で、なんでもやれればそれでいいや。」

「うわアバウト、だけど理不尽なほど完結的かつ絶対的最強になる願う。」

「それで完了だよ。」

「…なんていうか、転生理由とか目についたからなんだけどここまでおかしなやつを選んだ私って運がよいのかな？悪いのかな？」

「運？まっくすうれぴーとでもいってればいいんじゃないですか。」

「いやだ、もう送る、もういや」

「そう？じゃのんびりと純愛を楽しむからハンカチかんで妬ましやうっていつててください」

「イラつく…その敬語がイラつく…ナデポ願っという純愛願っ時点
でむかつく…」

そういう俺が目をつぶると…世界が反転する。

暗いくらい世界へと入り…暗いくらい世界へと出る

「…は？」

いたのは、深い森のような場所だった。

第一話『森の中らしい』

ガキイン、ギョインツという音が森に響き渡る。

「刹那ッ！」

「あぁっ！」

ドンツという銃の音さえも混じり、刀が月の光を反射し、たまにキラキラと光る

ただいえる

「なあにこれえ」

と、だけ。

気が付いて周りを見回し、そして見つけたのは学生証、おそらく俺はこの学校の生徒なのだろう。

そしてこれは憑依、というものだ。

帰り道がわからないことに呆然としていると、音が鳴る、人がいるのか！？と感激して向かえばこの光景。

非常識だ、俺がいつたらおそらく全人類にリンチにあうと思うけど

「ッ　　数が多い！」

おやおや片ポニ御嬢さんが頬に汗をたらして苦しそうな声を出す。後ろにいる褐色な…お姉さん？もつらそうな顔をしている。

これは助けたほうがいいかもしれない、だけど介入していいのか？

刀でズバーッてきたりしない？怖いんだけど

「百烈桜華斬！」

おやなんか技を繰り出し消滅させたぞ？大丈夫そうだな…頭くらいある石を持っていたんだが、必要なさそうだ。そう思って放り投げるように上に投げる。

自身の力をまだ知らなかったようで、石は軽々とポーンと飛んでいく。

「ちよ、うそだろおい！」

そう思つてあちらにいる少女たちがいるところに、それは起こった。ひゅんひゅんひゅんと加速していき、石は下へ落ちる。そのときだ、暗闇から巨大な影がでてくる

「なッ！？奇襲か！」

片ポニヤ褐色が驚いているが、冷静に対処すれば大丈夫だったのだろう、すぐに刀をもった少女は握り、刀を振るおうとすれば、腕をつかまれる。

「な…！」

いつの間にか、横にほかの鬼がきている、そのうえで…自分の刀を掴んでいるのだ、

「はな…！」

離せ、そう叫んで無理やり切り裂こうとして、気づいた。

逃げられない

「じめ　ね、この　ん」

ごめんね、このちゃん、親友の少女の昔の呼び名で呼び、謝る。
護りきれなかった、それが心に突き刺さる、だがその苦しみもわず
かだろう…私はもう死ぬと彼女は悟っている。

だが奇跡が起きた。

『ゲアアツ!?!』

俺が投げた石が、鬼に直撃した。

攻撃をしようとした腕が止まる、それに気づいた少女は、刀をつか
んだ鬼を切り裂き、巨大な鬼をさらに切り裂く。

「…危なかった…」

「刹那、大丈夫か？」

「ああ…だけどこの石はどこから」

そういつて刹那といった少女はぐるりと周りを見回し…俺と目があ
った。

視線がピリピリしてくる、これが警戒心をもった視線というものだ
ろうか

「何者だ!?!」

「…いついとうきに俺はどうしたらいいのだろうか
うん、決めた

「うわーん！ドラえもん！刀をもった美少女と銃をもった美少女？が襲ってくるよオ！」

「あ、ちょー！」

「なんで今私のほうは疑問符をつけられていたんだ？」

後者の声から殺気が見える！今すぐ逃げなければ！…えっと加速ス
イッチオン！

「ま、待て！って速っ！？」

「すごい速さだな…魔力の類は感じられはするが、そこに熟練した
感覚はない、魔力はあるが関係者ではないといったほうが適格か。」

「そのほうが問題じゃないか！？」

「そもそも刹那があらさまな警戒心をもったことが悪いんだろう
？」

龍宮の言葉に何も言い返せない、そしてすでにあの少年の姿はない。
助けられたということを一瞬でも忘れていた、…悪いことをし
た。

「…ぐっ、も、もう見えない」

「仕方がない、学園長に報告して帰ろう。」

「…そうだな。」

また会ったらお礼をしよう、それで色々聞かなければ、そう思っ
て学園町室へと歩き出す。

また逢えたらいいな、そう思う。

主人公 s i d e

生徒証をみる、名前は『天音 光輝』
ある程度走り回った後に後ろの二人の気配がなくなったので一息つ
いた。

「ううっ、わからん。」

「ほう、なにがだ？」

「（転生後の）俺が何者かさっぱりわからん。」

「それは記憶喪失というものでは？」

「考えてみれば（記憶がないわけだし）そうだな、帰り道がわからんからどうすればいいんだろう…って誰!？」

振り向けば、西洋人形のようなきれいな少女がそこにいる。

金髪の長い髪がサラサラとなびきながら、後ろには緑色の髪色をした長身の少女がいる。

「なんとという美少女二人組」

そう本心を告げれば小さなほづの少女が顔を赤くする。

「なにをいきなりいつているんだキサマは!」

「なにつて、本心?」

「ツ…話が進まない、勝手に進めるぞ、で、お前は記憶がごっそりないということではないな?」

「いいんじゃないですか?」

「軽いな、自分のことだというのに、もっと驚かないのか?」

「何が変わろうとも俺は俺ですからね、ま、それでいいんじゃない? 過去なんて知らないし、今を生きれば十分でしょ。」

そういえば、笑い始める金髪美少女、幼女といってもいいかもしれ
ない姿だが、風貌は大人っぽい
その笑い続ける状態に呆然とするしかない俺

「ついてこい、一晩ぐらいは泊めてやる、明日学園長に合わせてやる。」

「なんという優しき少女だな、完璧だ」

「おいていくぞー!」

「こちらです。」

おいて行かれそうだが、さっさと行かねば

エヴァンジェリン side

「マスター」

「なんだ?」

従者である茶々丸がチラツと後ろをみて聞いてくる。

おそらくアイツのことだろう

「よいのですか?泊めるなどして」

「別にいいだろ、アイツに殺気は感じられなかった、まああったとしても軽くひねってやるがな。」

「…そうですね。」

漏れ出すほどの魔力、気、だが感じられるのは実力者の程ではない。実力者の力を隠せるほどであれば苦戦するだろうが、この学校の生徒であることは学生証からでもわかっている。そして記憶喪失といった事柄も嘘ではない可能性が高い。

こちらに確実に気づいてなかった上に独り言をきいたのだ、嘘である可能性が非常に低いといえる。

さつさと明日学園長に引き渡してやるう、そう思いつつ家へと向かった。

主人公 s i d e

家に入れてもらった、不思議と甘い香りがすると思うのは俺の勘違いだろうか。

「女の子の家は初めてだとおもっているのでドキドキします。ファンシーなログハウスといったところでしょうか、人形の多さも目につきますが、かわいらしい趣味だということで結論をだしましょう。」

「誰に説明してるんだお前は…って家の匂いを堪能するのをやめる気色悪い!」

「マーキングしてもいいですか」

「つまみ出すぞー！」

「ごめんなさい」

言っというて変態すぎると理解した。

大丈夫か俺、テンションおかしいぞ俺…まあいつものことだけど

「美少女の家とはこれはこれはいただきます。」

「どこを食うつもりだ貴様は！…でどつするんだお前は、これから。

「

「学園長室にいきます。」

「ああ」

「金を奪います」

「待て！、さっそうと犯罪に手を染める宣言をしてるんじゃない！
普通は部屋を探してもらって親の電話番号を教えてもらった後に病院にいかせてもらうとかだろうか！」

「おおー！」

「おおーじゃない！それが普通だ！」

「いやわかってたんだけど、なにいつてるの？」

「うがぁぁぁぁぁ！」

ぶつつんとしたらしい、なんて短気な少女なのだろう、美少女が台無しだ。

後ろの長身美女が、『ああマスターなんて楽しそうな…』とかいってるけどおかしいんじゃないだろうか。

「まあ今日は寝かしてもらっよ、落ち着いたら寝なさい、よい子は寝る時間ウヴオア！！」

蹴られた

第一話『森の中らしい』（後書き）

テンション壊れ気味。

全力でぶっ壊れてみる。

主人公を f a t e 的に強さを教える (前書き)

というか、たぶん簡単に教えられるのがそれしかない

主人公をf a t e的に強さを教える

【真名】 天音光輝

【性別】 男

【属性】 混沌・善

【身長】 166cm

【体重】 58.2kg

【ステータス】

筋力A++ 敏捷A+ 耐久A+ 魔力EX 幸運D 宝具 -

【固有スキル】

直観 C

戦闘時に限らず、最適な展開を感じ取る能力。判断力と共にこれぐらいあれば怪しまれない。

魔力放出 C

魔力放出、というよりも力任せに吹き出す感じ。だから必要じゃない魔力もつかってしまっし、気を付けなければ吹っ飛んでしまっし。

魔術 EX

魔術という域を出ている。すでに奇跡という域。

：いや神の奇跡のようなものですけど

動体視力 A

動きを見極める能力、戦闘能力が低いので見えて避けられてもその攻撃を利用するなどの戦術はできない。

マイペース C

どんな時でも自身のペースを忘れない。高すぎるほどに迷惑である。

【宝具】

魔術そのものが宝具の域なため、そういえるものは存在しない。

魔力、魔術ともに常識など完全無視したレベルだが、戦闘能力に関しては低い。

そのために、動体視力が高くとも、瞬発力が高いのでよけられるが、反撃などはできない。

戦い方は未熟だが、やはりスペックが高いために補っている。

才能も高いために、これから伸びる。

能力は『考えたものをできる』能力ではなく『知っている能力が使用可能になる』程度の能力なので、調節や強化に関しては修行次第。筋力、耐久、敏捷などは、この世界『では』ありえない程度の能力。魔力、気の関係なしに大地を割ることができるし、殴られてもすぐに起き上る。動きも早い。

結局は気、魔力のある人物と戦うと負けることもある。

本格的に強くなることを決めれば、勝率は格段にあがる。

主人公をf a t e的に強さを教える(後書き)

- 暇だからf a t eのステータス表示で考えてみたシリーズ -

【真名】 右代宮 戦人

【CLASS】 キャスター

【性別】 男性

【属性】 中庸

【身長】 180cm

【体重】

【ステータス】

筋力E 魔力D

耐久E 幸運C

敏捷E 宝具 -

【クラス別スキル】

陣地作成 -

魔術師ではないのでこの能力は消えている。

道具作成 -

魔術師ではないのでこの能力は消えている

【固有スキル】

戦闘続行 A

屈しかけたとしても再び復活する能力、時間はかかるがどんな状況下でも復活する。

覚醒 A

屈しかけたときに発動する。回数制限あり、全ステータスをあげて再び舞い戻る。

反撃 C

自分に不利な環境、もしくは敗北しかけているときに発動、一時的にステータスがあげる。

黄金の魔術師 A

召喚魔術、ともに魔術が使用可能となるスキル。
多種多様な召喚が行える。

魔術 B

黄金の魔術師が追加された瞬間に追加される。厳密にいうと右代宮戦人は正当な魔術師とはいえない。

【宝具】

『エンドレスサイン』

ランク：A + 種別：????? レンジ - 最大補足 -

魔術、宝具例外なく無効化する壁。

物理攻撃に対しては効果がない。

覚醒が一度発動したらこの宝具は追加される。

『青き真実』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ - 最大補足 -

魔術師に対してランクは一段階あがる。

対魔力の抵抗は訪れず、杭、剣など多種多様なタイプがある。

覚醒が二度起こした時に宝具として追加される。

『赤き真実』

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ - 最大補足 -
剣、杭などのタイプがある。

覚醒が三度起こした時に宝具として追加される。

『黄金の真実』

ランク：C+ EX 種別：対人宝具 レンジ - 最大補足 -
剣、杭などのタイプがある。こめる魔力によって無限に威力をあげる。

黄金の魔術師のスキルが追加された時にスキルとして発動する。

『黄金卿』

ランク：EX 種別：????? レンジ - 最大補足 -
固有結界、家具並びに右代宮家全員総出でお出迎えする。
お出迎えという名の虐殺。

この中ではすべてのものが生き返る。

【武器】

自分の持っているものとはいえないので付け足してみるだけ

『煉獄の七姉妹』

七つの大罪をモチーフにした七姉妹を召喚する。

黄金の魔術師スキルがなければ召喚不可能。

『ゼパル・フルフル』

愛によって強くなる二人。

愛を魔力に変換し、戦人の魔力を回復することができる。

実を言うとFate/zeroで雁夜さんに召喚させる小説を書いていた時期がある。

小説内では、エンドレスナインは対ギルガメッシュ宝具として存在する上に、キャスターのクラスの上、エンドレスナインは魔力を必要としないことから、ギリギリな状態になりながらも最後まで行く、途中間桐臓硯をエンドレスナインを令呪をつかって拡大し消滅させるなんて意味不明なことをやっていたり、時臣を死にそうなところを救って、最後に和解させたりしていた、桜自体は間桐の姓を返さないなんてよくわからないことをしていたけど。

あのコンテナだらけのところ一度の覚醒、ギルガメッシュをちよつと圧倒したり、バーサーカーやアサシンにぶつ殺されたりして、最後の最後にギルガメッシュと戦い、令呪を使って黄金の魔術師へと覚醒させ、雁夜は戦闘中に魔力が尽き、色々あって遠坂家の面々がいたので『遠坂のみんなを護れ』と最後の令呪を使う。

その後色々あったわけだが、ギルガメッシュを倒した拳句に聖杯はゼパル・フルフルを使って愛のエネルギーをもらって魔力をもらって、黄金卿に取り込んで、黄金卿の中ですべての召喚を還して、一人アンリマユに焼き殺される最後：を書いていた。

今更だが設定がむちゃくちゃだなあと思った。

第二話『学園長という名の…』（前書き）

天音光輝「気が付けば、目の前が火の海・・・そんな中、天音光輝という少年は暑さで吹き出す汗をぬぐいながら笑みを浮かべる。

「・・・へっこれが絶対絶命つてやつか」

そっぴいながらもその顔は絶望をしておらず、寧ろ・・・今の現状を楽しんでる、そんな戦人の目。

彼の脳内に絶望という文字はないのだろうか・・・いやこの男の頭にはあきらめないという言葉のみがあった。

「火の海？ハツダメだな、全然駄目だぜ・・・！火が強ければ強いほどに木は燃え尽きて脆くなる・・・そこをいつきに突き破る！ああ・・・見つけたぜエエエ！」

ニヤリと笑みを浮かべる、その視線の方向にはポロポロと燃え尽き始めている壁、わずかな一点、だがこの男は自らの眼力でその希望を手繰り寄せた・・・！

「オオオオオオオオオオ」

咆哮・・・それはまるで巨大な動物の咆哮のような迫力を続かせて、彼は走り出す。

「俺のこの手が光って唸る！お前を倒せと輝き叫ぶ！」

「シャインングウウウ・・・フィンガアアアアア！」

爆発・・・そして脱出、だがそれは空中に放り出されてのだ。

この高さ、いくら彼でも死んでしまふ。その顔はとても悔しそうだった。

「チツクシヨウツ！」

嵌められた、壁をわざと薄くしての二重トラップ――敵を侮っていた。油断大敵とはこのことだった。

嘆いてももう遅かった。目をゆっくりと閉じて覚悟を決めた男は、ただ一つの後悔を言葉にする。

「楓……！」

――そして彼は……死を迎えた。」

神「おい、プロローグを改ざんするな。この小説は作者がはっちやけて書いてみただけの糞小説だ。」

第二話『学園長という名の…』

「う…うあ…金髪幼女に蹴られる夢を見た。」

「ほう、何発でも蹴ってほしいのか？ええ？」

「ごめんなさい」

蹴りつける当の本人が目の前にいた。
起き上ってまっすぐと少女を見る。

「なあ」

「む、なんだ？」

「撫でていい？」

蹴られた。

ただ撫でていいか聞いたただけだというのにこいつは…

「いきなりなにをいつてるんだキサマは！」

「サラッサラだと撫でたくもなる、じゃああの長身の…」

「茶々丸です。」

「なでていい？」

「マスターの許可があれば…」

「ダメだ！絶対に撫でさせるな！」

「チツ」

「舌打ち!?!」

そんな会話をして朝食をもらって外にでる。
春：だろっ、桜の花びらがみえる。

「輝かしい朝というものだな、生まれ出た赤子の最初の朝というものはこういうものなのか？」

「知らん、それよりもさっさといくぞ。」

「ええーこの朝を堪能しようよエヴァたん。」

「黙れなれなれしい！」

「じゃ女王様。」

「ぶっ飛び過ぎだ！ほかにあるだろうが、エヴァンジェリンさんとかマクダウエルさんとか！」

「マクダウエルさん」

「気色悪い。」

「だったらなにがいいんだよ、エヴァンジェリ・・・エヴァンゲリ

オンさばとっ!？」

「間違つた言い直しをするな、誰が人型汎用決戦兵器だ！」

…完璧にいえるとはすごいな、ある程度オタクはいつていればわかるとは思つが、家にそんなものは置いてありそうな気配はなかったし、記憶力が高いのか？

まあそんなことはつきりいつてどうでもいいんだけど

「もういい、エヴァでいい…」

「ありがとう、よろしくエヴァさん茶々丸さん。」

「ああ…」

「はい。」

疲れたように返事をするエヴァさんをおいて、さっさと学校へと向かう。

学校へとすぐ到着する、…デカイ学校だな、なんて思いながらついていくと、声をかけられる。

「あれ？エヴァンジェリンさん？その人は？」

振り向けは、ツインテールの少女と、大和撫子のような少女がいる。

「おはようちな。それと近衛このかや、よろしゅーな。」

「ああ、おはよう。」

「おはようございます。」

「どうも、天音光輝です。学園長室に用があつてきました」

「神楽坂明日菜よ、よろしく。」

そう自己紹介して学校をみる、…そういえばなんで女子中学校にあるんだろっ、学園長室

「…エヴァ、なんで学園長室つてここにあるんだ？」

「む？…そういえば何故だ？中心にあるわけでもないが…」

「中学生が大好きだとか？」

「どこの変態よそれ。」

アスナさんのツッコみ…冷静な突っ込みだが、それならなぜなのだろう。

「だったら…なぜだろう、おお家が近いとか？」

「家は遠いが。」

「」「」「」「……」「」「」「」

沈黙

「あ、よ、予鈴がなりそうね、い、いきましょこのか！」

「あ、そ、そうやな、まってなアスナー」

予鈴がなる、とかいいつつも予鈴まで三分もありそうだが、彼女らはいってしまった。

答えは出せずじまい、結局そのまま学校へと入る。

チクチクと視線がつきささったあとにエヴァと茶々丸へと視線がいき、外される、それを何度も繰り返されて学園長室へと到着する。

そしてノック　はしないで押しかける。この人には目上に対する常識的な行動とはないのだろうか。

「マスターのほうが目上のようなものですから。」

茶々丸さんがいつてくる内容が意味不明だ。

マスター「エヴァ

エヴァ>学園長

この公式からエヴァ「ロリババアという可能性にたどり着く。だがそれは恩人に対する浅はかな侮辱、そんな俺に育った覚えはない。

エヴァは中学校の制服をきていることも考えて
学園長「シヨタの可能性がでてきたりする

じいさんがいた

「エヴァは変態だったのか」

中学生の制服を着るババアだったのかエヴァは

「何を考えていたか知らんが皮を剥ぐぞ」

怖いなアまったく

部屋へ入ると、おっさんとじいさんがいる。

ダンディズムあふれるようどつか抜け落ちている人と、頭の長い老人だ。

「お初にお目にかかります、私天音光輝と申します。生まれは忘れて育ちは知らない、そんな男であります」

「フオツフオツフォ、はじめまして、じゃな。学園長の近衛近衛門じゃ」

「うん、はじめまして。高畑・T・タカミチだよ。」

…自己紹介を軽くスルーされた。

後ろでエヴァが吹き出した音がする、あとでいじくってやるう

「バルタン学園長」

「バルタン学園長!?!」

ブフウツという音が鳴り響く、エヴァと高畑といった男性が吹き出した音だった。

「…高畑くん?」

「い、いえなんでもありません。」

「住んでいるところを教えてくださいんですが。フォッフォッフォ」

「ぶふうっ…くはっや…やめる腹が痛い」

エヴァが何をいつているのかわからない、ちょっと真似したかった
だけなのに

「むう…住んでいる場所だが男子寮の304じゃ、どうやら記憶喪失というのは本当らしいのお」

「はい、記憶喪失になってエヴァに恋しました。」

「な、なにをいつているんだキ」冗談です。「…茶々丸、ペンチも
つてこい」

「ごめんな「マスター、もってきました」速い！」

驚きの速さだ！やめろ！じりじりと近づくな！

「…話を進めていいの？」

「…あ、すみません、この金髪バカが。」

「…本気で殺してやるうか」

「ごめんなさい。」

「すまぬが…刀をもった少女と銃をもった少女に見覚えはないかの？」

…刀、片ボニ少女の刹那ちゃんか

…銃、美人なお姉さんか

「変なものに向かって刀をふっていたラリった少女と、銃をもって打ちまくってたこれまたラリった女性ですか。」

「ラリ…いやの、ふむ…これは教えたほうがいいのかなの？」

「それが学園長が決めたほうがいいと思います。」

「教える？あれですか、女子中に学園長室をつくる理由とかですか？」

「ほう、それはぜひとも教わりたいな。」

「この世界には魔法があるんじゃない。」

逃げたなこいつ

第三話『長い頭のファンタズイー』（前書き）

天音光輝「記憶喪失になった俺をまっていたのは、ラリッて刀を振り回す少女、銃を変な怪物にぶち込み続ける…少女？だった。うお！？どこからこの銃弾がきた！」

??「チッ」

天音光輝「…美少女二名が怪物と戦っておりましたが、俺の力を理解していなかったために放り投げたかと思ったら大きく放物線を描いて、窮地に落ちている侍美少女を助けたのですが威圧感を向けられ逃走することにきめ、逃走したところでエヴァンジェリンと出会い、夜も遅いので保護してもらって、次の日学園長、つまりこの巨大な学園都市まほらのトップのもとへと行くことになる…そこで出会った学園長は、見られてしまったのは仕方ないと頼んでもないのにベラベラと魔法の存在をしゃべり始めるのだった。」

学園長「色々とおかしい部分を打ち消した拳句の果てにサラリと罵倒しとる!？」

第三話『長い頭のファンタジー』

この世には魔法があるんじゃない

「・・・その言葉を聞いたとき、僕の中で常識という壁がガラガラと崩れていくような、そんな感覚が起こる。

それは言いようのないもので、「ええいさっさと話をすめろ」「この世には魔法があるんじゃないよ、フォッフオッフオ」ということでよろうものですかフォッフオッフお」

「もうそのネタやめてくれないか?」

「嫌です。」

「即答!??」

「とりあえずいうと、貴方の長い頭の中にはきつとファンタジーが詰まってるんですね」

「そしてスラリと罵倒!??」

「リリカルマジカル学園長 ですか。」

想像してみた

3秒で脳が拒否して消去された。

「おいヤメロ、想像してしまった。」

エヴァンジェリンさんもお怒りのようで、殺気っぽいものをぶつけてきます。

…それと高畑先生や、腹を抱えてこらえてないでさっさと話を続けましょう。

「…高畑君？」

「く…が、学園長をわる…くくく…いつちゃ…ゲフウッ」

ダメだ、これは。

話が終わらない。

これは話を続けなければこの話は終わらないだろう。

これはおふざけをやめてちゃんと聞かなければ…

だが断る。

「てくまくまやこんてくまくまやこん女子中学生になあれ、これで長い頭ともおさばらよ」

「ブフオオツ」

「私近衛近衛門14歳女子中学生！花も恥じらう乙女なの！」

「も…もつやめ…」

「やん！エッチな風ね！」

「ぶ…く…は…くくく。」

「やだっもしかしてナンパ？近衛門ちゃんは安くないんだぞ」

「い…息が…！」

おやおや高畑先生が死にそうなうえに

学園長が高畑先生をみる眼が絶対零度だ。

後ろで爆笑している金髪幼女は無視として。

「…もうやめてくれんかの…」

本気で疲れた顔をされてはやめるしかないだろう。

死にそんな高畑先生はほつといて

「近衛門はとつても怒ると怖いんだゾ」

「ベフウツ!?!」

…あ、死んだ

「ごほんごほんごほんっ、えー魔法なんじゃがのおお!」

無理やり話を変えようとしている近衛門ちゃんかわいい。

「つまりは精霊の力を借りて呪文を唱えてやるもののお、種類は色々あるのじゃ!」

「スタンダードな魔法だね。変身呪文で女子中学生に変身よってか。」

「もうやめてくれんかの…」

「うん、今はやめる。」

「できればずっとやめてほしいんじやが…」

うん、それ無理

「というわけで、この世に魔法があり、正義の魔法使いというものがあるわけなのじや。」

「へえ、正義の魔法使いか、ぶつちゃけどーでもいいや。」

「ふお？てつきり正義の魔法使いとかに興味を示してくると思ったのじやが。」

…まあ男の子ならそうだろう。

だが俺はアルバイターの上死んだ身、そんな感情は起きないよ。

「ぶつちゃけ生きていければいいんですよね。」

「わしよりフケとらんか？」

「14歳女子中学生は言うことが違う。」

「……」

おんやあ？シカト決め込んできましたかね？

「いいかい近衛門ちゃん、女の子にも辛いことがたくさんあるんだよ？」

「…さて、お主のことじゃが、住んでいる場所も学校も特定済みじゃ、そういえばどうしてあんなところにいたのかのあ？」

「それを俺に聞きますか？」

いい感じに話を変えてきやがった、そう思いながら俺は普通に返答をする。

「…すまんかったの、返答に記憶喪失といったものを感じられなかったからてつきり忘れておった。」

「まあいいですけど、俺ってどうすればいいんですか？」

素直に謝ってきたために軽くスルーして聞いてみれば、学園長は一枚の紙を渡してきた。

「そこに書いておる。」

そういわれて見てみると、たしかに住所らしきものが書かれている。そして一枚の手紙のようなものを渡してきた。

「これは？」

「うむ、これはの、病院の紹介状というものじゃ、何故記憶喪失になったかもわからない上に、先ほど魔法使いの話をしたじゃろ？そのせいかもしれぬ、だから治療費くらいは負担しようと思つての。」

気前のいいじいさんじゃないか。

そう思いながら手紙をもらう。

「…というか、魔法使いのせいとは？」

「世界樹というものがあるじゃろ？この土地に、それを狙う魔法使いがいるので、撃退をしているのじゃが 戦いをみたじゃろ？」

「そうですね。あの娘たちは大丈夫で？」

「ああ大丈夫じゃよ。」

ありがとう、そういわんばかりの笑顔でそういわれたとき。俺の心は安堵した。

ふざけた去り際だったが、それでも結構心配していたのだろうな、なんて思つて、そのらしくなさに笑いが込み上げる。

「そうか、じゃあ俺はいくよ。」

そういつて踵を返すと、呆然とした金髪幼女がいた。

「…どした？」

「お…お前、普通に受け答えできたんだな。」

「金髪バカが。」

殴られた。

第四話『中二病と黒歴史』

学園長室を出たそのあとの話。

俺は紙を一枚持って中学校を出る。

「やれやれ、終わったなア」

「それはよかったな、では行くぞ茶々丸」

「それでは光輝さん」

気が付けばエヴァさんと茶々丸さんたちが歩いていくところだった。

「まっってください!」

・・・しかし、ここまでされて何もしないととしては、我が人生の恥。故に呼びとめて、何か感謝をしなければ。

「なんだ?」

振り向くエヴァさん。

「お礼に料理を作ります!」

「ほう、料理が上手いのか?」

「いえ、全然」

「ならなんでいった!??」

言いツッコミだエヴァさん。

「しかし、何かお礼がしたいのも事実です、だから楽しみに待っててください。」

「…きたいしないでまってる。」

「わかりました、がっかりしないレベルのものをもっていきます。」

「お前はとことん失礼な奴だな?!」

「冗談です、全力でうれしがるものをもってきますよ。」

そういうと、ふんと鼻を鳴らして中学校のほうへといってくるエヴァさん。

「エヴァさんが『オフォオフォオ』と笑いながら道行く人にコースクリューぶちかますようになるぐらいのを」

「どんなのだそれは!?!」

「Oh…こいつぁ驚いた、ツッコミのために戻ってきやがったぜ?」

殴られた

気を取り直して自分の部屋へと向かおう。

よし迷ったぞ

「…すげえ俺、二行で迷子になった。」

そんなメタな発言は置いておいて、これからどうするか。

べっべつに作者がにわか乙とよばれるほどに原作知識がないから引き延ばそうなんて考えてないんだからね！

…そんなことはどうでもいい、ハッキリ言おう、迷った、どのくらい迷っているかという会社をリストラされた二人子供と妻がいる会社員の人生くらい迷った。

「何故、森にくる。」

気が付けば自分が知る、己が始まった場所、森。

石が粉碎されているところをみれば、ここは俺が石を投げて鬼にぶつかったところだ。

魔法でも使ったのだろうか、あの戦いの跡はすでにない

「…よし。」

迷ってはみたものの、これは好機だ。
自分の力を存分に使ってやろうじゃないか。

「――我が暗黒の右腕よオオオ！自らの力を解放しイイ敵を破壊し
つくせエエエ！」

しーん

なんて漫画なら出ている音が聞こえて気がする。
なにこれ死にたい、とにかく穴に入ってそのまま埋められたい。
いやなんていうか本当に死にたい。もう言葉で表せられない。
いや別にちよつとかっこよくいつてみたかっただけなんです許して
ください。
半笑やドンビキな顔で俺を指さすのはやめてください、お願いしま
す。

「うオオオオオオオオオオオオ！」

神よ、全力で謝ります土下座します、この力の使い方教えてください！

そう心で念じた瞬間に――世界は変わった。

気が付けば目の前に神様、神様は俺をみて、おもむろに息を大きく吸う。

「ねえねえどんな気持ち？中二病っぽいことにあこがれて、できるだろって確信してやったっていうのに何にも起こらないけどねえ今どんな気持ち？ねえねえったらー」

この神様いい笑顔でそんなことをいつてくる。俺はあのAAのごとく直立だ。

「というわけでどうすればいい？」

「さて、もう一度や」というわけでどうすればいい？「ね」というわけでどうすればいい？「…わかった教える。」

俺が真摯にお願いしたらOKをくれた。
なんていい人なんだ。

「この能力はなんでもやれるっていうのだけどさ、なんでもやれるっていうのは『知識のみ』なんだよ、こんな能力があった、だから使える、それだけの話。」

「つまり、俺の暗黒の最強の腕は？」

「中二病乙、できません。」

「…」

「ついでにあれは監視している魔法先生にみられてました。」

…

…あれ、戻ったらとりあえず全力で石に頭を叩きつけて自害したくなってきた。

「ていうか…監視って…」

「そりゃいきなり膨大な魔力と気を持ち始めた人が来たら警戒するでしょ？」

…反論ができない。その通りである。

だが、黒歴史が見られてしまったことに対し…俺は死にたい、全力で死にたい。

「いやまで、なんでもできるんだから記憶を変える力を使えば大丈夫だよな!？」

「ま、いいと思うよ?じゃあいつてらっしやい。もうもどってくんな。」

気が付けば……俺はもりのなかにい解説なんかいるかああああ！

「円を使用！近くにいる敵を察知、発見！」

魔力放出スキルを使用、超高速で接近！

「な！？は、はや。」

うるせえ忘れろ！

「天音光輝が命じる！忘れろオオオオ！」

……こうして俺の貞操は守られた。

第五話『失ったことと得たこと』（前書き）

天音光輝「高額収入の胡散臭いアルバイト、高収入につられて調べてみると、それは敵の罠だった。周りには火、そして外に出ればそこは崖、巻き起こる殺人事件…この不可解な事件、解決してやるぜ！じっちゃんの名にかけて！」

神「死ぬのはあなただけです。」

第五話『失ったことと得たこと』

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの朝は遅い。

「マスター、起きてください。」

従者、茶々丸に起こされて、フラフラと起き上る。

やはり吸血鬼、真祖の上封印やらなんやらで魔力が全くなく少女とほとんど同じといっても、朝は弱いのだろう。

席に座り、いまだボウツとする頭を回転させながら飲み物を取り、飲む。

一口・・・喉を鳴らし、食道を通っていく感覚。目が少しさえた。

「やあ」

・・・天音光輝がいた。

「ぶっふおおおおおお！？」

「残像だ。」

飲み物を吹き出すエヴァ。

そして天音光輝は・・・

そのまま吹き出してくる飲み物が直撃した。

「できないよね、うん、どうやってやるかわからんし。」

そういつてため息を吐いて、布巾を手に取り顔を拭く。

「な、な、ななな何故キサマがここにいる!」

「来たから」

「そうじゃない!理由だ!」

「ひとりぼっちはさみしいもんな。」

「意味が分からん!」

やれやれといった感じで天音光輝はため息をつく。

「わかってくれよ。 - - 記憶喪失の少年をみる眼を…一緒に住んでいるルームメイトの「…だ、大丈夫か?いつてくれよ、なんかあったら」という言葉と共に、チラチラとみてる…そんな空間を」

「…な、なんかすまない。」

ひきつり気味の顔でエヴァさんが謝ってくる。やめて、そんな目で見ないで。

「で、食べに来た。ごっつあんになります。」

「ハア、お前を保護したことをちょっと後悔しているよ。」

「むしろここに住みたい。」

「それは絶対にやめろ」

そんな馬鹿な会話をしていると、茶々丸さんが朝食を持ってきてくれる。

並べてくれるその姿をみながら、ふと気づいたことがある。

「あれ、いつしよに食べないの?」

「私はガイノイドですから。」

「ガノトトス?」

「茶々丸のどこが水竜だ。高圧水流も出さんぞ。」

…この幼女は何故わかるのだろうか。

いや、モンハンをやればわかるだろうが、速効ツッコむやつなんて結構頑張ってる人だ。

「ガイノイドとは女性型のアンドロイドのことです。」

へえ…女性型のアンドロイド。

…は?

え?アンドロイド、いやまてよなにそれ怖い、どんな科学のレベルをもってるんだこの世界!?

どんな奇妙奇天烈さだ!

次に読者は『お前が言うな』と考える!

「食べれないのかあ…」

「いえ、必要がないだけで食べることはできます。」

…食べることができると…！？
消化できてるのか！？食べたものはどこにいつてやがる！
…いやまて、食べることが出来るアンドロイド、洋風の街並み…ふ
っわかった、わかつちまつたぜ…

「この事件の犯人がな！」

「コナン君風になにをいつているんだお前は。」

エヴァさんのツッコミはスルーして、ゆっくりと俺は顔をあげる。
この子はたぶん、自分をロボットとしてロールしているんだ。
ネトゲでいうあれだよあれ、ネカマ的なやつ。

「あいやまたれい！」

「いきなり時代劇風になつたぞ。」

「その女子、お主のことはよくわかった、しかしそれではいけない。お主たちはいわば一心同体のようにみえる、ならばともに食事をしてみてはどうか？」

「時代劇風を続けるのか…」

呆れたような顔をするエヴァさんをさらにスルーする。

「ですが…」

そういつてエヴァをチラリとみる茶々丸。

「やだやだ、絶対に一緒に食べる！」

「駄々つ子かキサマは！…まあいい、茶々丸も席につけ、騒がれては面倒だ。」

「はい、マスター」

ハアとため息をついてエヴァさんがいうと茶々丸さんは自分の料理をとって席に着く。

その光景はほほえましかった。

生前は一人暮らしをして結構立ってて、ちょっとホームシックだったりしたからな

「なんか、懐かしい感じがする。」

そういつて笑うと、エヴァさんはちょっと苦い顔をした。

「…不安か？」

「何にもなくなっちゃった気がするからなあ…」

記憶喪失、というか転生でこの体の記憶がないだけだが、何もなくなっちゃったというのは共通だろう。

「なんか、懐かしい感じがする。」

その言葉を聞いて、思い出す。こいつが軽々しいもので忘れていたが…こいつは記憶喪失だった。無くなった記憶と今の光景がつつすらと重なっているのかもしていない。

「…不安か？」

だから、ちょっと聞いてみた。するとアイツはちょっと悲しそうに笑った

「何にもなくなっちゃった気がするからなア…」

さみしそうに、今にも泣きそうな口調でそういったアイツ…天音光輝は笑う。

空元気だということは見て取れた。

「…お前の親は死んでないだろう？気遣ってくれるやつらもいる。」

「エヴァさんもいるしね。」

「む…あ、ああ。」

フォロー、なんて自分には似合わない言葉をかけると、天音光輝は嬉しそうに笑いながら自分…エヴァの名前を出してくる。

その顔が、ふとアイツと重なった。無邪気な…そんな笑顔が。

「よし、ならば毎日でもきてやろう。」

「つまみ出すぞ。」

- - - side end

- - - side 主人公

この世界で初めて友達ができたぞ！
ちょっとうれしいです。

食べ終わり、エヴァさんと茶々丸さんにお礼をいって外に出る。
気持ちが軽い、もう何も怖くない！

…あれ、なんかフラグを立てた気がする。

「…まあいいか。」

そういつて気持ちを切り替えて歩き出す。
いざ向かうは新たなる学び舎！

「待ってくださいー！」

…と思ったら呼び止められた、そちらのほつをみると…その
にいたのは

「刀を振り回してたラリってる少女!？」

「フリッ!?…ち、違います!」

…そこにいたのは、刀を振り回していた少女だった。

第五話『失ったことと得たこと』(後書き)

ストックが

もうすぐきれる

第六話 『魔法剣士キリサキ刹那』 (前書き)

天音光輝「」

神「…え？なにもいわないの？」

第六話 『魔法剣士キリサキ刹那』

目と目があう

しゅーんかーんー

「刀を振り回してたラリッてる少女!？」

「ラリッ!?!? ち、違います!」

こんな会話が出会った。

- - s i d e : 刹那

学園長から、助けくれた彼、『天音光輝』というらしいが、彼の場所を教えてもらった。

記憶喪失、ということに驚いたが、お礼のために手伝う機会があるかもしれないと思う。

魔法のことは伝えておいたらしい、お礼を言わなければと思い彼の部屋へと向かえば、そこにいたのはルームメイト一人だった。

その間のルームメイトとの会話

「はあ…」

「なんで俺こんなにかっかりされてるの!？」

「何でいないんですか…!」

「あ、あのさあ、光輝のやつに伝言しておこうか？」

「はあ…帰ります。」

「あ、あれなんだろう涙がでてきた、エへへ。」

終了

がっかりしながら帰ってみると、人の気配を感じて視線を向ける。

- -そこにいたのは彼だった。

何か嬉しそうだったが、思わず駆けだして呼び止めたら - -

「刀を振り回してたラリってる少女!？」

「ラリッ!?!ち、違います!」

最初の発言がこれだった。

- - s i d e : 天音光輝

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ!

『歩いてたら昨夜刀を振り回していた少女とであった』

な…何をいつているかわからねーと思うが。

…大丈夫かな?いきなりズバァーって斬られないかな?

「この痴れモノが!」とかいいながらガンガン切り裂くイメージが流れた。

殿中でござる!殿中でござる!意味わからないけど。

「斬らない?」

「斬りません！」

「刺さない？」

「人をどう思っているんですか!？」

「刀を振り回して怪物を切り裂き続ける少女。」

そう率直に返答すると、少女はorz こんな感じになった。

「あ、あれは必要なことで、仕事のようなものなんです!」

「刀で切り裂くだけの簡単なお仕事です…!」

「簡単でもありません!」

何故かムキになってくる少女、刹那。
仕方がない、ちゃんと聞いてあげよう。

「ああ、ちゃんと聞こうじゃないか。」

「なんか偉そうなところがイラツときますね。ですが…ありがとうございます。」

「ああ、その前にかくかくしかじかかっていってくれない？」

「え?かくかくしかじか…ですか?」

「わかった、昨夜偶然とはいえ助けしてくれたことにらんだことに

対するお礼と謝罪だね。」

「ええええええええ！？」

何故わかった、といった感じだけど…推理すれば簡単だ。

「何故わかったと言いたげだな。」

「は、はい。」

呆然としながらも頷いてくる刹那、刀振り回し少女、略してSWG
(Sword Wilding Girl)

「…いま恐ろしく嫌な名前を付けられた気がします。」

「気のせいです。」

「ハア…それはいいとして、どうしてわかったんですか？」

「バーローそんなこといえつかよ。」

「何で!？」

エヴァといいこの娘、SWG刹那ちゃんと言い、いいツッコミだ。
この世界の人はツッコミのレベルが高いのだろうか、いや環境に
よるしこの学園都市内でのことなのだろう。

「ツッコミ学園都市と呼ぼう。」

「やめてください。」

考えてみると恐ろしく不名誉だが・・・それを突き通す。
24時間この学園都市を『ツツコミ学園都市』と呼ぶ！

「まあ何故わかったかということ教えなければね。刹那ちゃんが
「なんでわかったんでござるか！夜も寝られないでござす！教えて
くれないなら日課の裸で学園一周をあなたの名前を叫びながらする
でござすよ！」何ていうから教えるしかないよね。」

「なに捏造しているんですか！？それ以前にその語尾はなんなん
ですか？！ああもう突っ込みどころが多すぎてツツコミきれません！」

「いいツツコミだ…だが30点・・・赤点だ。」

「何をかっこよく意味不明なことを言ってるんですか！？」

ツツコミ疲れたのか、ハアハアと息を切らしている。

だらしない、これをあと一時間は続けようかと思っていたのに。

「殺す気ですか！？」

ダメだよ刹那ちゃん、メタなところにツツコミいれちゃ。

「推理は簡単だよ、昨日結果的とはいえ助けた、それに学園長に色々
なことを教わった。お礼を言わないなら会おうとすることもない
だろう？基本助けただけで別に声かけあう仲でもないし。それで君
の様子をみるとちょっと申し訳なさそうなわけだし、謝罪もあると
したらにらまれて「あ、俺死んじゃう」って思ったときぐらいだ。」

「そこまで恐怖を感じたんですか？」

「いや、嘘だけだ。」

「…」

もうSWG刹那ちゃんは突っ込んでたまるかといった具合だ。

「だがそこは突っ込みどころじゃないんでな、馬鹿め！」

「なんか負けた気がします…」

疲れた顔したSWG刹那ちゃんが言う。

…まあ朝の時間帯はそんなに時間がないのでさっさと終わらせてしまおう。

「じゃあ、ありがとうね、あとごめん。」

「あ、はいそうで…ってなんであなたがお礼と謝罪をしているんですか!？」

「ん、ああそうだね、じゃあよろしくお願いします。」

「…なんか変な感じです。えっと助けてくれてありがとうございます、まず、今度何かお礼をさしてもらいますね。あと、にらんでしまっごめんなさい。」

「別にいいさ、お礼は今度会ってからで。」

「あ、はい。それではもうすぐ時間がギリギリなのでいきますね?」

「うん、じゃあね。」

そういつて俺たちは互いに礼をして帰ってゆく。

「じゃあね魔法剣士キリサキ刹那ちゃん！」

全力逃走を開始する！

「なんですかそのよび…え？…ポケ逃げ!？」

第七話『ルームメイト』（前書き）

天音光輝「・・・もう一人の転生者は、目の前の泣いている少女、千草へと手を伸ばす。両親を失った悲しみ、それについて自分以上にわかるやつはこの場にはいない。転生者は両親を失った、・・・この少女とは全く逆の立場だけだ。

正義の味方、ネギまという原作は読んだことがあるし、それについても反感がある、そして今、その犠牲者が目の前にいる。

だからこそ手を伸ばした、それはこの少女を利用していわれなくても反論はできないことをしているのだろう、それは理解していたが、転生者は心の中で隠し通す。

辛辣な修行、鬼畜と呼ばれても仕方がないほどのことを差し向ける。だがしかし、この少女はどんなにポロポロでも後ろをついてくる。

・・・だからだろうか、この少女がいとおしくなってしまったのはそして、原作の始まり、リョウメンスクナノカミの封印を解く場面そこにもう一人の原作にはいないはずの少年がいた、少年は怒っていた、転生者：俺のやったことに、復讐に手を貸すといった行為に、だからこそ戦いは必然・・・ぶつかり合う魔力、そして勝ったのは彼、ポロポロになった自身はああ終わったのかと諦め目をつぶる、彼はとどめをさそうと拳を振り上げる。

・・・ふわりと甘い匂いがした。

そこにいたのは・・・彼女、千草だった。

涙ながらに俺をかばう・・・もう女性だったな。

そして・・・彼女の独白を俺は聞く。

そこには彼女の想いが込められていた、だんだんと俺のことが好きになっていったこと、そして復讐が恋心に包まれていつの間にか霧散していたこと、そして、一緒にいたかったということ・・・そして俺は「

神「さてや、作者が考えていた物語を書くな！」

第七話『ルームメイト』

家に帰ってみると、そこにいたのは肩を抱いて泣きながら笑っているルームメイト、なにこいつ気持ち悪い。
ついでに名前は『西園 勇』にしその いさむ

「なにかあったのか馬鹿」

「いきなりばかよばわりかよ!…聞いてくれ光輝」

「断る!」

「お前が聞いてきたのに!？」

やはりこの学校は『ツッコミ学園都市』だ、いいTUKKOMERがいる。

TUKKOMERがなにかとというと、特に意味はない、ローマジ変換して無理やり最後にERをつけただけだ。

「聞け!聞いてくれ!聞いてください!」

「うるせえ黙れ」

「なにこれ辛辣!なあ、光輝、同じ歳くらいの中学生に心底どうでもよさそうな感じにされたらへこむよな?」

「うん、お前の会話が心底どうでもいい」

「この鬼畜!」

いいだろう、いい二つ名だ。

…といっても俺はDSでもなんでもない。

「いいよ別に聞くさ、どのくらい罵倒してほしい？この変態」

「俺DMじゃねえよ！？いや、うんさっき中学生がきて」「この変態！」「タイミングがおかしいうえに言われたいわげじゃないよ！？」

「わかった、普通に聞く。」

そういつてまっすぐ勇をみる。ホツとしたように会話をし始めた。

「よかった…っていうかどうでもいい会話にどれだけ時間をかけてるんだ俺は。えっとな、さっき中学生がきたんだけどな。」

「うんうん。」

「来てお前がいるか聞いてきたんだ、それで俺はいないって答えた、そうするとな…思い切りため息をついて、俺がフォローしようと伝言するかと聞いたら俺の存在がどうでもよさすにされてそのままため息を残されて帰って行った。」

「そうか（笑）辛かったな（笑）」

「あれ、どうしてだろう、お前の語尾に何かが見える…、もういや、なんでもいいや、とりあえず食堂いこうぜ、飯食いにさ。お前遅かったからもう時間ないぞ？」

「あ、うん食べてきた。」

「…あれ、俺お前のこと待ってたんだけど、俺『記憶喪失だから俺がフオローしなきゃな!』なんて考えてお前のこと待ってたんだけど。」

「…それは本当にすまん。」

「…うわああああん!」

中学生男子が「うわあああん」なんて泣きながら走っている光景を始めてみた。

…だがさすがにひどいことをした気がする、昼飯は奢ってやる。あれ、昼飯給食制?じゃあだめだな。

そんなアホな会話をしたがどうでもいいだろう、さっさと教室に行かなければな。

記憶がないからついていくしかない。

「ここだ。」

「ハッピーうれピーよろピクねー！」

突撃してみる。

教室は沈黙した。

「ああ、隣の教室だから。」

「なッ…!?!」

勇の口元がつりあがる。

にやりと笑いながら、その顔は物語っていた。

計画通り

「ふふっ、僕がやられっぱなしでも思ったかい？」

「記憶喪失の男の子を騙して辱めるなんて最低だ！」

「なんともいうがよい！フハーハーハー」

悦に浸っている勇をみて、俺はゆっくりと教室に入っていく。

悦ん見浸っている勇は気づかずに笑い続ける。

…その数分後に真っ赤な顔して勇が戻ってきた。

…授業終了

「授業が終わったな。」

…少々退屈だった。

「一緒に帰るか？」

横に勇がいて、声をかけてくるが首を振る。

昨日の今日だ、病院に行かなければならない、あと家族に連絡を。

「病院行ってー家族に連絡してーってあるからな。」

「そうか…まあがんばれよ」

「ああ」

声を掛け合って帰っていく勇を手を振りながら返す。
勇って異常なほどいいやつだよな。

「さて、病院に行くか。学園長に書いてもらった紹介状は…あったな。」

さて、行こうか。

第七話『ルームメイト』（後書き）

主人公が普通の少年だったとは限らない

第八話『少女』

認識阻害魔法。

この学園都市で使われている魔法だ。

この都市が魔法使いの隠れ蓑のような存在だからこそ使われているものだ。

認識阻害魔法とは、いわば『おかしいことをおかしいと思わない』ようにする魔法だ。

単純だが、外界との齟齬を生じさせてしまふ、正直言ってしまう魔法使い側としては使わなければならぬ魔法ではあるが、一般人としては少々害が残る魔法だ。

- - かからなくとも

- - かかっても

そしてその認識阻害を受けない稀にみる人、千雨は昔からいじめを受けていたりした。

- - 可笑しいのはみんななのに

- - 可笑しいと言われるのは自分

だから地味を装ったりしているわけだが　　そうなるしかできなかつた、行ってしまえば被害者側といえる。

そんな少女は今、夜に森を歩いていた。

コンビニに行かなければいけない用事があったからだ。

「はあ……」

ため息を付きながら、まだ春の始まりのために夜は冷えるために、少し震えながら歩いていった。
その時だった。

・・・でできたのは、巨大な異形だった。

「え？ちよ、ちよっとまてよ、なんだよこれ・・・!？」

side：天音光輝

病院をいつてきたわけだが、紹介状があっても待たされた。
紹介状ってなんだっただろう。

「ハア」

ため息をついて歩き出す、腕には薬の袋をひっかけている。
もらった薬は精神に関係のある薬だったりとで、あまり効果は見込めない。
記憶喪失なんて症例があまり多くないから当然だろうが。

時間的に結構夜になっている。勇のやつ飯くってはいるだろうけど、大丈夫かね、なんて思いながら歩いていると、どこか遠くのほうから女性の叫び声が耳に入った。

「…ん、こつちか？」

叫び声、というところになにかあったな、という直観が働いて即座に行動する。

- - s i d e : 千雨

「ハアツハアツなんだってんだよ！」

全力疾走をしているが相手のほうが速い、巨大な体躯のくせにするりとスキマをすり抜けて走ってきやがる。

こつちは狭い隙間を縫うように走ってはいるがどこまで続くか…頭によぎるは過去のこと、これが走馬灯ってか？ハハ笑えねえ

「ちつくしよっ…」

涙がでてくる。

「だれか…」

誰か、助けてくれ。
そう叫ぼうとしたときにそれは起こった。

- - s i d e : 天音光輝

「円を発動 - -」

能力：HUNTER×HUNTER

詳細：敵の察知能力的なもの

見つけた。

だが周りに複数の人間がいる。

- - なんだ？

監視の可能性を考慮して、

「声がしたぞ！」

そう叫んで走っておく。

色々と方向を間違えながら、速い速度で。

1、2分で声の主は発見。

少女が襲われているのか！？

「なにか…」

なにかと考えてハツとする、監視の可能性だ。

- - ならばなぜ助けないとか疑問がではしたものの監視とかされて俺の能力とかみられたら面倒だ！

そんな時だった！

直観のスキルが発動したのは。

俺が魔力、気の総量が多いことはわかっている。

- - ならばそのみを使っていけばいい！だが熟練した動きはダメなうえにできない！

魔力放出！

そのスキルがあつたか！

ならば - -

「突貫じゃあああああああ！」

頭突きをするか！

- - 頭突き、それは頭で体当たりを食らわせること、体よりも固いためにダメージが大きく、一点集中するので、力は何倍もの強さになる。

「ガグオオツ!？」

敏捷 A +

その上に魔力放出

吹き飛ばないわけがないだろう。

そして巨大な体躯が吹き飛んだということは

当然俺の頭も吹き飛ぶわけだが

「考えてなグエバアツ!？」

死ぬぞ

すぐ死ぬぞ

絶対死ぬぞ

ほら死ぬぞ

ジエクトさんや、それ笑い話になりません。

「こんにちは」おおおおおあこしえういfrへいうえhdwふいへ
ふいへいう！

今なんか見えた！道着来て竹刀もった女性と何故かブルマの体操着
きた銀髪の少女がみえた！

「タイガーどうじょ」「シッコイわ！

ぼ、僕は…

「僕はしにましえゲフッ」

「死んだアアアー！？」

少女の叫びが聞こえたが、力が入らない、頭がグワングワンして・
・ああもうだめだわ…

起きれば、知らない天井だった。

「知らない天井だ。」

起きるとそこには昨夜の少女がいた。

「お、起きたのk…ですか。」

「いつもの口調でいいですよ、逃げながらボーイッシュな口調をしてましたよ？」

さすがに初対面だ、やわらかい口調にしないと。

え、SWG刹那ちゃん？学園長？ごめんわからない。

「…そうか。」

しまった、そんな感じの顔をして口調を戻す少女。

「僕の名前は天音光輝っています。貴方の名前は？」

「長谷川千雨だ。」

そんな感じで自己紹介をする、そして軽く会話をする。

痛みはない、頭を触るとズキツとするが血は流れていないようだ。ホツとしていると、誰かが部屋に入ってくる、見るとそこにいたのはエヴァさん。

「こんばんわ、マクダウエルさん。」

「気色悪いしゃべり方をするな。」

「死ねばいいのに」

殴られた

これ絶対理不尽だ。

第八話『少女』（後書き）

「小説の中で一番問題なのはネタが理解されることなのさ」

「理解されないネタの寒さといったら計り知れない」

「けどそれでも作者は馬鹿なんだよね」

「ははは、でもそれはしかたないよね。」

第九話『魔法』（前書き）

屋根裏部屋 過去の記録で

見れば思い出すのは 昔の友との会話

流行だった漫画 焼き立てジャパン 鋼の錬金術師

そこでみつけた一冊の漫画 『CCCさくら』

一冊をみつめて 全ての巻をみつめてみる

その漫画は姉のもので 姉が買っていて

そんな漫画を 適当に読んでいた

昔のことを思い出す

そんな姉はもういない 姉はひとり立ちしてこの家にくるのはたまにだ。

だけどだからこそ その漫画が 姉さんがいたという思いで見せてくれ

懐かしさのため息がでる

一ページ

一ページ

読みふけて

ああこんな物語だったよな なんて想いだし

また懐かしさのため息を漏らす

そして理解した あのころにはもどれない

BL!

ロリコン教師！

シスコン！

魔法少女！

趣味がおかしな親友！

連想したらきりが無い

もう俺はダメだと感じた。

第九話『魔法』

廊下に響き渡る足音。

天音光輝こと俺の横にはエヴァさん茶々丸さん、そして千雨ちゃんがいる。

そして歩くのは女子中学校、二日連続でくるとは俺でもびっくりだ。

「ふう、近衛門ちゃんは何故僕を呼んだんだ？」

「ククツ…やめろ、その呼び方は、思い出してしまっただろ」

「…？なあ、どうして天音は学園長のことをそんな呼び方するんだ？」

俺の学園長の呼び方に吹き出すエヴァと疑問に思う千雨ちゃん。

「理由は簡単だ、学園長が中学生を夢見る少女だからだ。」

「意味が分からない。」

…たしかに

.....

学園長室にて、ゆっくりとドアが開く、そこにいたのは碇ゲンドウ

のごとく椅子に座って手を前に組んでいる学園長と高畑先生。

「ダンディー高畑と夢見る少女リリカル学園長さん、お久しぶりで
す。」

「な、なんで僕はそんな売れない芸人みたいな名前なのかな。学園
長のはいいとして」

「高畑君…減給じゃ」

「学園長はダンディーなお方だよ！」

「高畑君…」

「学園長は女子中学校に学園長室をつくる理由だってなにかあるは
ずさ！素晴らしい人だからね！」

すばらしい変態に変換された。

「もうやめるんじゃない高畑君…悲しくなってきた」

何故かわからないが学園長が悲しくなってきたようだ。
いや、まあいい。

「もういいじゃないですか、長い頭に少女になって近衛門ちゃんに
なる幻想が詰まっていることは。僕は学園長が女子中学生の制服を
きて鏡をみて、『ぽっ、わしもまだまだやるのぉ、高畑君もわしに
メロメロじゃ』なんてつぶやいてたことも忘れますから！」

「…学園長。」

「誤解じゃ!?!」

ズリズリと後ずさる高畑先生と涙目の学園長。

そして千雨ちゃんとエヴァさんは

「…コイツもしかしていつもこんななのか?」

「そうだが?まあ思考は常識人らしいが。」

「…そういうのが一番手がつけられないんだよな。」

なんていつていたが無視しよう。

.....

「この世には魔法があるんじゃない。」

そういつて言葉を継げる学園長、その顔に疲労が残るのは何故だろうか。

おそろく「おぬしのせいじゃ」「おそろく」おぬしのせいじゃといつとろじに「

おそろく魔法を教えるか忘れさせるべきか考えていたのだろう。

おお、さらに疲労が増えたようだ。

そして告げられた千雨ちゃんはというと、まだ少し納得ができなそうだ。

それはそうだ、馬鹿にされて、必死に否定し続けたことを肯定されたのだ、納得いかないのも無理はない。

「…話はそれで終わりですか。」

「うむ、すまんかったの、とりあえずきめておいてくれんか、『受け入れる』か『忘れるか』を」

「…はい。」

無言、空気が重い。

千雨ちゃんがでていったあとの学園長室の空気は重く漂っている。

「学園長」

その空気の中、俺がゆっくりと告げる。

「…なにかな、天音くん。」

「わかっているんでしょう？忘れても根本的な解決にはならない、なんて。」

そういつて首を振る俺、そして学園長は…

「そうじゃな。」

認めた、何も変わらないことを、そして苦しみ続けろという言葉

彼女に告げた。

「彼女だって馬鹿じゃない、確実にわかっている、逃げた先は迷い続けた迷いの森だつてことを。何も変わらない、真つ暗闇の森の中みつけた、正体不明の光におびえたつて無意味だつてことを。」

「…そうじゃ、の。」

「これは魔法使いというものの自体が招いた不祥事だ。たとえ被害が一人であつても、切り捨ててよい権利など誰にも有さない。…だが学園長、あなたという立場を考えてもこの決断は否定はしないさ。」

「ふお？」

いきなりの肯定に戸惑いの声を隠せない学園長と、そんな俺を啞然としてみる二人、茶々丸さんはただじつと俺をみる。

「貴方は学園長だ、…つていうか俺も千雨ちゃんと同じ立場だよ、なんで俺が学園長のことをフォローしなきゃいけないんだ。」

「そういえばそうだったな、いつまでもペースを崩さないから忘れていたぞ。」

「フォツフォツフォ、なんにせよ…ありがとう天音くん、心が軽くなったようじゃ。」

「僕からもお礼を言わせてもらつよ。」

「はい、でもですね学園長、フォローしてもらったからとはいえ、何もやらないのは無しですよ。やれることがあつたらやるう！つて

「感じでいきませんか？」

「フォツフォツフォそうじゃの。」

「というわけで・・・」

「俺に魔法を教えてくださいだごうか」

「フォツ!?!」

「ごめんね、近衛門ちゃん
ただ言っよ」

計 画 通 り

「ククク…やはり一筋ではいけない男だな」
「なんて金髪ロリがいつていたが無視しよう。」

第十話『チート爆裂』

「さあやってみる。」

そういつて俺を指さす少女、エヴァンジェリン。
俺の手には練習用である杖一本。

そしてやる魔法は火よ灯れ

そう魔法をやるうといわれると、エヴァさんが申し出てくれたのだ。正直俺の日々のおちよくりを逆に仕返ししてやるために申し出てくれたとしか考えられないが、引つ張り出してきた別荘とやらを持ち出して、変な場所に持ってこられた上に杖を渡され、目の前で魔法を使われてやれといってきたわけだ、よし、説明終了。

そして俺こと天音光輝は全力でやるうと思う。

魔法、といっても俺自身には能力、チートといったほうがいいだろう。

外部（神様）から作り出された能力があり、おそらく可能だ。

だが加減が分からない。

『どれくらいの魔力で使えます！』

というのがわからないのだ。

だから - - 全力だ！

「うおおおおおおお！」

「え？おいお前！？」

ゴゴゴゴツと魔力放出スキルを使用し、魔力を出す。
そして杖に向けてダイブ。

「プラクテビギ・ナルウウウ！」

「おい！やめろ！やりすぎ！アールデスカットオオオ！」

魔力に杖が耐え切れなかったらしい。
カッと、まばゆい閃光があたりを包み込んだかと思えば杖にひびが入り

爆発し

リアルに火柱が立った。

どこかでエヴァンジェリンの悲鳴が聞こえた気がするが、気にしない。

「…たぶんこの魔法だけで俺、世界と戦えるかもしれない。」

焼野原となった別荘をみながらつぶやく俺と、周りをゆがませるほどに殺気をあたりに漂わせ、こちらに一步步近づいてくるエヴァさんをみながら、それでもこの人と戦いたくないな、なんて思った。

「…」

そして俺はそんな彼女をみながら。

「じよ、上手に焼けましたー！」

「死ねエエエエエツ！」

そんなことを思わずしてしまったのが運のつき、その後俺はひたすらに逃げ回ることになる。

それは騒動に気付いた茶々丸さんが入ってくるまで続いたのだった。

ボロボロな別荘の中、嫌になってきたというよりなんで私こいつを教えようと思ったんだろうみたいなの顔をしながらエヴァさんが俺をみる。

「もういい、修復は後回しだ。魔力の加減を知ってもらおう。…このまま上級呪文とか使ったら確実に別荘そのものが消滅する。」

「よい判断です、マスター」

「茶々丸のしゃべり方を真似するな気色悪い。」

「しかし魔力の加減っていったってどうすればいいのさ？」

「そんなもの今の魔法を魔力を抑えながら使い続ければわかるだろう。」

「よし、じゃあ行くぞ！これが私の全力全開！」

「よしわかった、お前は絶対に最上級の魔法を死ぬまでぶつけられないんだな。」

…「めんなさい。」

「さて気を取り直してアールデスカット」

ポツと火が付く。

「よしできた、次は何をすればいい？」

「…」

「エヴァさん？」

「さいしょっからそうやれエエエエエ！」

「べへウツイ！」

魔力の込められた拳で殴られた。

「一時間でここまで疲れるとは…」

「がんばれ！」

「お前のせいだろうが！…もういい、お前に基礎は必要ないな、あの程度教えたらずくに戦闘にする。寧ろいたぶらせる」

なんだろうすごいいい感じに本音をぶちまけてくれたよこの金髪少女。エヴァンジェ

「そんなに男をいたぶって遊ぶのが好きなのかい？」

「誤解するようなことを言うのはやめる。お前だけだ。」

「わかった、仕方がない、こちらも教えてもらっている身だ。ひざまずいて足をなめてあげましょうか？」

「お前に冗談でも言うつと後でおちよくりまわされるのが目に見えているから言葉は返さないぞ、さて…すぐに魔法を覚えてもらう、覚悟しておけ」

そんなこんなで魔法の勉強がはじまったのだった。

第十一話 『僕に黒歴史は思い出せない』（前書き）

天音光輝「作者がこの作品でやりたいことベスト3」

神「む、なんだ？」

天音光輝「1）近衛門ちゃん萌えをはやらせる」

神「おい」

天音光輝「2）原作主人公を萌えに目覚めさせるー！」

神「おいおいおい！」

天音光輝「神楽坂明日菜を自分好みのツンデレへと変貌させるー！」

神「作者アアアー！」

第十一話 『僕に黒歴史は思い出せない』

- 学園長室

「はいどうぞ。」

夜、時間も19時に差し掛かったころだろうか。学園長室に訪問者が現れる、エヴァンジェリン、真祖の吸血鬼である。

そんな少女にすこし驚いたが、学園長はすぐに立て直す。

「フォツ、なんじゃエヴァか。入るときはノックぐらいしてくれんかの？」

「知らん、私は疲れた。」

見てみればちよつと疲れたような顔、まあ天音光輝かれならば仕方ない、と学園長と報告をするために学園長室を訪れていた高畑先生は苦笑する。

「どうかしたのかい？ そういえば天音光輝くんはどのくらい強くなつたんだい？」

高畑先生はエヴァンジェリンへと天音光輝かれについて聞いてみる。いきなり巨大な魔力と気を解放した生徒、そして記憶喪失、報告からすれば基本的な学習能力生活能力は特に問題はないが、人間関係の記憶がごっそりなくなっていることだ。

…気にならないというものがおかしいのだ。

「アイツの話はするな。」

疲れたような表情、そして返答の拒否。

そんな状態が高畑先生の好奇心をくすぐらないわけがない。

そもそも聞いてはいけないというほどの話ではないため、大人の対応というものは必要ない。

「できれば話してくれんかの？」

そういったものは学園長も同じようで、同じように聞いてみる。

するとエヴァンジェリンは仕方がないといった具合にため息をつけて口を開いた。

「アイツは一発で火よ灯れの魔法を火柱に変えた。」

「…は？」

「そしてアイツは魔法全属性を行使」

「…え？」

「そしてそれらすべてでことごとく別荘を粉碎した。」

「…」

「アイツは純粋な力でナギを倒せるだろうな。」

なあにそれえ

そう学園長と高畑先生が言いたくなかったが、言葉を心に収める。

「そ、そりえケホン、それは本当かい、エヴァ？」

「事実だ。なんだアイツは光の一矢で別荘を半分吹き飛ばしたぞ。」

…あんぐり

それが似合う現状を創り出す。

この場にいる全員の頭に「これが余のメラだ」な一コマが流れた。

「よもやナギ以上のバグキャラがいようとは…」

「が、学園町なんだか頭が痛いので休んでいいですか」

「フオツ！？全部わしに丸投げするつもりかの？」

「何を言っているんですか学園長、僕は頭が痛いんです。ああいたいなあ」

「…大丈夫だ、お前たちもいい感じに巻き込んでやる。」

「「……」」

この時

高畑先生はどうやったらオールデイに学園外の仕事をいれることができるかと考え。

学園長は『明日ぐらいにほかの人にこの座を任せるわけにはいかんかの』と逃亡する計画を練っていた

が

「逃げられると、思うなよ？」

いい表情をするエヴァンジェリンに肩を落とすしかなかった。

- - 天音光輝の部屋

「やっと帰ってこれた」

結構ハードだったけど

けっこう強くなった気がする。

まだまだ俺は弱いな、うん。

もっと魔法の威力をあげなきゃ！

- - お願いだからやめてくれ

…？誰かの声が聞こえて気がするが、気のせいだろう。

目指せ、学園消滅！

- - 学園長室

「フオオオオオオオオ!?」

「な、なんだどうした!?!」

「どうかしたんですか学園長!?!」

いきなり学園長がビクウツと体を揺らして叫ぶ。
そんなことに驚き、学園長を二人はみる。

「い、いやすまんの、なんだか誰かが本気で学園をつぶしかねない
発言をした気がしての!」

「そうか、ボケたか。…いや、すまん…アイツならやりかねないな。」

「あは…アハハ…」

- - 天音光輝の部屋

飯を作ってみる。

力、というのは結構フリーダムなようで、知識さえあれば料理でさえもできてしまうらしい。
作るものは簡単なものにする。

包丁を持ち、目の前の魚をみる。

包丁をチラリとみる。

…思わず振ってみる。

危ないくらいに軽く振って。

魚を再度見る。

「俺に裁かれる気分はどうだ？」

…何故かそういつて。

「…何言ってるんだお前」

勇のことを忘れていたことに気付く。

「つーかいまの恥ずかし「雷犁熱刀オオッ！」ゲフオッ!？」

…勇の記憶を消去することに決定する。

たぶん魂が体に近づこうとしているのだろう。

きつとそうだ。

大学生で中二病誘発何て恥ずかしすぎる。

そう思い今後気をつけようとして俺は包丁を構える。

…さすがに雷犁熱刀はなかった、うまい飯を作ってやる。

第十一話 『僕に黒歴史は思い出せない』（後書き）

「…久しぶりだね天音光輝」

誰だこいつ、無表情な少年、フェイト。

できれば金髪ツインテールのほうであってほしかった。

「忘れたのかな？君の全てを奪った組織である僕の顔を」

…何を言っているのかはわからない。

だが俺の失った記憶は、おそらくコイツを知っている。

そして俺は、この体のために何をするべきなのか

…だけど

ただ言えることがある。

…俺がこんな面白そうなものを

見逃すわけがないじゃないか。

シリアスならばシリアスっぽく、そして場を掻き見出し

そして相手のあの無表情の仮面を崩す！それが俺、天音光輝であり、俺の魂である！

「…忘れるわけがないじゃないか、少年。」

「そうかい、君なら怒り狂って立ち向かってくると思ったんだけどね。」

どんな因縁かね、コイツと俺は

「だから、なんだというんだ。たとえ心が煮えたぎっても、俺の頭はいつも静かに、まっすぐに。あのころに俺は・・・まっすぐに生きると近い、まっすぐに先を見据えると誓った。∴いくぞフエイト・アーウエルンクス、お前は一番前に出てきてはいけないやつの前に出てきてしまった、そして・・・お前は今日にて終わりだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5309y/>

なんかもうどうでもよくなってきた

2012年1月6日11時49分発行